

県研究主題

学習指導要領の内容を踏まえた教育課程の編成と教育活動の工夫・改善

提案 1

提案者 町田 健 ・ 鈴木 可恵（横須賀地区）

< 研究主題 >

「主体的な関わりを通して、お互いに尊重し合える子」を目指して

— 外国語活動を中心に据えたコミュニケーション能力の育成 —

1 提案内容

27年度より英語教育強化地域拠点の指定を受け、近隣の小・中・高と研究開発を進めている。児童の実態として、学習習慣が身に付いている、また思いやりもあり日常的に明るい挨拶ができる、ということがあげられる。半面、自己肯定感が低く自分の考えに自信がもてないことやコミュニケーション能力に課題がある。これらの実態を受け、学校教育目標と関連させ、「コミュニケーション能力」の育成を研究テーマに設定した。

(1) カリキュラム・マネジメントを通じた「コミュニケーション能力」の育成

① 新学習指導要領にみるカリキュラム・マネジメント

- ・ 資質・能力を一層確実に育成
- ・ 知識の理解の質を高め資質能力の育成
- ・ カリキュラム・マネジメントの確立

② 英語教育・外国語活動の増に伴う教育課程編成

学校行事の増、授業カット時数の見直しを行うことで48時間の授業時数を確保することができ、現行通り実施することができた。

③ 教科横断型カリキュラムの実践

どの学年でも、相手意識を大切にしたいコミュニケーションの時間とした。また、英語使用の必然性を生む場面設定や話し手聞き手の育成に力を入れてきた。また、英語表現の中に児童の気持ちをどう乗せていくのかを意識し、5つのポイント（笑顔、表情、声のトーン、反応、身振り手振り）を1年生から活動に取り入れた。テーマの実現に向けて、英語教育ではどのような姿をめざすのか、学年の系統性を意識しながら他教科と連携して研究を進めていった。

(2) 取組の成果と課題

① これまでの成果

「英語が好き・どちらかと言えば好き」の児童が8割を超すなど意欲的に取り組む様子が見られた。理由としては、英語をツールとして友達を理解し合うことに興味をもっていることがわかった。このコミュニケーション力は他教科行事の場面で発揮され始めている。

また、関わり合おうとする姿は様々な場面で感じている。また、相手の失敗を責めず学級集団で励まし、高め合っていこうとする姿勢は高学年から低学年に浸透し始めている。

② 見えてきた課題

週2時間により、授業進度によって活動の急速化は課題であると言える。外国語活動から、

教科・外国語科に変わり苦手意識が生まれている。また高学年における年間 70 時間の外国語が授業時数を超過することは困難である。また、初対面の人とのコミュニケーションにはまだまだ課題がある。

## 2 協議内容

### (1) 時数確保、多忙感について

時数はどの教科も大切だという方針のもと、時数確保に関しては、意見を出し尽くすまで話し合った。来年度も高学年は 70 時間という現状維持で進めていく。職員としての負担感はあるが、児童が相手意識を伸ばそうとする姿を感じている。それを励みとして教員総意で進めている。

### (2) 評価について

評価については現行と同様で記述式の 3 観点で行っている。次年度に向けて現状の授業では新観点で授業を作っている。保護者や指導要録への記述は現行通り。評価は行わず。

### (3) 小・中・校の連携

中学校は乗り入れ授業という形をとっている。中学校 3 年生が 6 年生の英語表現を話すムービーを見ることをしている。先輩の姿を見ることでよいモデルとなる。高校は具体的な取り組みはないが、英語の担当者が集まってキャンドゥリストを作っている。その流れの中で授業を見合っている。5 つのポイントは近隣の小学校とは共有している。また、授業の流れについては小中とも共有している。

### (4) 教員間の「意識の共有化」について

32 年からの本格実施に向けて、職員間で一枚岩になって取り組んでいる。新しい取り組みをするときの橋渡しは難しかったが、ベテランには範を示していただき、若手には叱咤激励の声掛けをしてきた。

### (5) 教員の研修と授業づくりについて

研修は十分ではないが、1 名英語専科がいる。カリキュラムづくりのサポートレクチャーをしている。職員研修は年 1、2 回だが、ALT は全時間配置されており、研修や授業で活用している。また、「英語の授業」ではなく「コミュニケーションの授業」としてとらえているので、職員会議の中で各学年の活動の交流や意思確認をしている。

## 3 まとめ

### (1) 横須賀市立田戸小学校の実践について

第 1 回研修会で「英語教育は発音や文法ありきではない。まずは、心ありき。英語を通して児童の心を育て、英語を使って自分の気持ちを伝えることを大事にしたい」とあった。長年研究してきた、「コミュニケーション能力の育成」「小中一貫教育」と関わりをもっていることを拠り所となり、研究をスタートされた。職員が一枚岩になって取り組んでいたのが素晴らしい。授業時数の確保は各学校でも大きな課題である。現行の授業時数に中学年 35 時間、高学年 35 時間に上乘せとなり、学校行事等の見直しが必要である。

今後としては、横断的な学習をやる場合、今、何の教科の何の単元をやっているか、我々教員は押さえる必要がある。そして単元目標、教科の特性を理解し、しっかりと児童に指導すべきである。授業時間の確保に向けて工夫がなされている。時数のカット等どうやって捻出していくのかは各学校の課題である。

**<研究主題>**

コミュニティ・スクールの仕組みを取り入れるまでの過程とそれを生かした特色ある教育課程の工夫・改善

**1 提案内容**

「コミュニティ・スクール」とは、「学校運営協議会」を設置している学校のことであり、本校は市内で最初に指定された。地域・家庭の協力を得ることで、「地域とともにある学校づくり」に向けて、様々な取り組みを行い、研究を進めてきた。

**(1) コミュニティ・スクールの導入の流れ**

導入にあたり、コミュニティ・スクールマイスターを講師として迎え研究会を実施し、「状況把握」「双方向性」「継続性」が大切であることを確認した。それを踏まえてPTA広報で放課後の過ごし方の現状を把握し、地域の声アンケートも実施した。学校に対して地域が望むこと、期待することを調査し、学校運営協議会を発足した。

**(2) コミュニティ・スクールを生かした教育活動****① 学校経営ビジョンの変化**

従来の学校経営ビジョンの変化の内容に加え、新たに「地域と共に歩む学校を重点に据えた学校経営」が加わった。学校・家庭・地域の役割を明確化した。

**② 活動の展開**

5年生の総合的な学習の時間から発展した地域清掃、2年生の生活科での学区探検、学校・地域と共に行った「あいさつ運動」など、「地域に出る」ことを強調したことによって、児童の学習意欲が高まり、学びに大きな変化を与えた。

**③ 家庭学習の手引きの作成**

学校運営協議会での協議内容を受け、PTA本部が作成した。児童の家庭学習のアンケート結果、家庭学習の努力目標、家庭学習の内容などが掲載されている。PTAが親目線で作成したことに大きな意義があった。

**(3) 成果と課題**

地域と学校との連携が密になり、学校に対して今まで以上に興味を持ってもらえるようになった。また、様々な場面で手助けを申し出てくれるようになり、学校行事への参加者も増えた。

一方で、学校の外に出ることにより活動に時間がかかることや、地域の人材の確保する難しさなどの課題がある。過去に関わった人を人材バンクにまとめるなど記録を残していく必要がある。

**2 協議内容****(1) 学校運営協議会に向けての取り組みの工夫**

地域の声を取り入れるためにアンケートを取ったり、学校の取組を伝えるため回覧板をこまめに回したり、ホームページを毎日更新するなどしたが、今あることを上手に活用していくことも大切だ。また、地域に「なぜそれをするのか」という目的を丁寧に説明することも重要である。

## (2) これからのコミュニティ・スクールのあり方

現在、コミュニティ・スクールの導入率は低い。導入校も、会議の回数や時間の設定などの課題も多い。また、委員と教員が顔を会わす機会が少なく、今後どのようにしていくか考えていく必要もある。

## 3 まとめ

### (1) コミュニティ・スクールについて

学校・家庭・地域で目指す児童像を、じっくりと時間をかけて考えていくことが大切になる。そしてそれを共有していく必要がある。

### (2) 地域の実態を踏まえた教育課程

学校運営協議会によって、学校の取組に対し、新たな発見や関心をもつ地域の人が多い。教員が日常的に取り組んでいることを共有でき、有意義な時間となっている。

### (3) 地域との連携について

これからの教育課程の理念として「社会に開かれた教育課程」とあり、地域全体で児童を育てようとする考えが重要視される。児童のために何をやっていくのかという視点を大切に、学校と地域が連携・協働していくことが必要だ。

## 研究協議

協議の柱：『学習指導要領の内容を踏まえた特色ある教育課程の編成の工夫・改善』

## 1 主な意見

### (1) コミュニケーション力の育成

- 小学校・中学校だけでなく地域の学校同士のつながりを大切にした実践が素晴らしい。児童の実態と地域の様子を加味し、9年間を見通した教育課程を考えていきたい。
- 小規模校の児童のコミュニケーション力の育成の難しさを感じる。地域を活用してけると良い。
- 外国語活動の時数の確保が課題。児童にどのような力をつけさせたいか考えていくことが大切。

### (2) 地域との連携

- 地域と関わる必然性をどうもたせるか、また年度当初の計画が重要。
- 学校は地域の人の活躍の場と考えていけると良い。児童たちも自分たちが地域に守られている感覚をもてると素晴らしい。
- 学校・家庭・地域が、どのような児童に育てたいか共通認識をもつことが大切。

## 2 まとめ

(1) 児童が主体的に学ぶためには、教員がどのように学ぶ必然性を作っていくか振り返る授業改善が必要だ。それによってカリキュラムが作成されていく。

(2) 今後に向けて、取組を持続していく手立てを考えていかなければならない。学校や地域において共通する児童像をもつことが、取組の評価につながる。

(3) 現代において、よりよく生きていくためには様々な情報の中から最善のものを選ぶ力が大切になってくる。そのためにはコミュニケーション力と社会との交流が必要だ。新学習指導要領に合った提案だった。